

大阪樟蔭女子大学 人間科学 研究紀要 第1号

大学生のライフ・スタイルと価値志向

鳥 山 平 三

The Life Styles and Value Orientation of University Students

Heizo Toriyama

抄録：大学生の生き甲斐観とライフ・スタイルについて、いろいろな側面からアプローチした。まず、PILテスト（「人生の目的」テスト）を実施して、大学生たちの生き甲斐感の程度を測定した。そして、「人生の見方」について、楽天的・悲観的・日和見的という3つの中から1つを選択させた。PILテスト得点の平均は、「楽天的」な人のものが最も高く、次いで「日和見的」な人のものが高く、「悲観的」な人のものが最も低かった。

「占い」を信じるか否かについて問うたところ、女子は6割を超える人が「信じる」と回答し、男子のほぼ6割が「信じない」と回答し、正逆の結果となった。

自己のさまざまな側面についての回答から見えてきたものは、現代の青年たちの対人関係の不如意さと苦衷である。対人恐怖の心性を相変わらず託っているのみならず、「優しさ」という表現の裏に真にうち解けがたい不信感と警戒心が見え隠れしているようであった。

目前に「死」が必然となったとき、大学生たちは自己欲求充足的となる傾向が強かった。身近な人への思いはあるが、基本的には利己的で自己愛的である。外部社会への働きかけや向社会的行動を企図する人は非常にまれである。

索引語：大学生、人生の目的、占い、対人関係、死生観

Key words: university students, purpose in life, fortune-telling, interpersonal relationship, view about life and death

問 題

本研究の主題である大学生の「ライフ・スタイルと価値志向」に関しては、すでに、最近のものとして筆者の先行研究（鳥山，1992，1993）があるが、今日、世紀の変わり目に際会して、彼らの価値観の動態はどのようなものであるかを探ってみた。

青年の価値観の諸相をうかがう調査としては、たとえば、筆者もメンバーであった共同研究「現代青年の行動様式と価値観」（1995）を挙げることができるが、その主眼は、オールポート・ヴァーノン価値テストによる価値観の分類とそれぞれの価値類型と現実生活状況との関連を見るものであった。その調査は、1970年代以降20年を経過しての比較研究であったが、価値類型の展開そのものにさほどの差は見られず、大学生たちの価値観の大勢

ほぼ同傾向を示した。そこでは、オールポート・ヴァーノン価値テストの尺度上の限界と質問項目の文言の古さによる要因が指摘され、所期の目的を十分に果たせなかった理由とされた。シュプランガー (Spranger, E.) の提唱した「価値の分類」6類型、すなわち、理論型、権力型、社会型、経済型、宗教型、審美型、はなるほど価値原型としては本質的で深淵なものであるが、それらを価値現型として捉えることの困難さと制約のあることが示されたのであった。

本研究では、実存分析家の فرانクル (Frankl, V. E.) の原案により作成された「人生の目的テスト」(P I L Test, Purpose In Life Test, 「実存心理検査」ともいう) の要点を独立変数として、人生への目的意識の強さに関連して大学生たちがどのような人生への態度を抱き、自己自身の属性をどのように捉えているかを調べてみた。

方 法

1. 調査対象

調査対象は、筆者の講義の受講生である大学生291人である。実施大学や受講生の所属学部は、天理大学人間学部、奈良女子大学文学部、島根大学法文・教育・総合理工・生物資源学部、そして、滋賀大学経済学部である。内訳は、男子145人、女子146人、また、1回生114人、2回生103人、3回生59人、そして、4回生以上15人と、調査対象の大半は1、2回生で占められている。

調査の実施は集団法で、それぞれの大学での講義中の課題として記名の上回答を求め、最後に調査用紙を回収した。

調査実施の期日は、2000年7月から2001年9月であった。

2. 調査に使用したテストとアンケート項目

(1) P I L テスト

フランクルの実存神経症理論をもとにクランバウ (Crumbaugh, J. C.) らが実存的空虚感を測定するために考案したものである。態度尺度・文章完成法・自由記述の3部構成で、信頼性、妥当性の検証を経て標準化されているものを、本邦では佐藤文子らによる改訂翻訳版(1990)として使用されている。数量的評価は、4つの枠組み(人生に対する態度、人生の意味・目的意識、実存的空虚感、態度価値)に基づいて行われる。

今回は、その中の態度尺度(Part-A)の20項目のみについて実施し、「人生の目的」意義を測定した。尺度は7件法により、項目それぞれの設問について、「自分に思い当たる程度の数字に○印をつける」方式で回答させ、その20項目の○印数字の合計でもってP I L 得点とした。つまり、最低点が20点、最高点が140点の範囲となる。

(2) あなたのライフ・スタイル—今とこれから—

これは、人生観や自己の属性について尋ねる設問について、項目選択(1つ、あるいは、複数事項に○印)や自由記述によって回答を求めるもので、筆者が独自に作成したもので

ある。

すなわち、

- ①あなたの人生観は、(楽天的・悲観的・日和見的・その他)。
- ②人生の目標としている人が、(いない・いる<それは、>)。
- ③あなたに欠点、弱点、苦手なもの、コンプレックスは、(ない・ある<それは、>)。
- ④あなたの「くせ」は、<>である。
- ⑤あなたは、星占いやその他のいろいろな占いを(信じる・信じない)。
- ⑥人生のキーワードは、(実力・努力・チャンス・家柄・学歴・性別・運命・謎・人柄・人望・体力・ルックス・体格・話術・>)である。＊2つ以上に○印を！
- ⑦もしも、癌や治療法のない難病とわかった時、あなたは残された時間をどのように過ごすと思いますか？
- ⑧あなたにとって「大切な人」は誰ですか？(1人：>)。
- ⑨あなたの特技や長所・魅力は何ですか？(>)。
- ⑩あなたの生き甲斐・夢・あこがれは何ですか？(>)。

このアンケート項目をP I Lテストの項目の次に続けて印刷し、同じ用紙で実施した。

結 果

1. P I Lテスト

調査対象の大学生有効回答数291人のP I L総得点の平均(M)は、90.95(標準偏差S Dは、16.30)であった。そのうち、男子(145人)の平均得点は、89.35(S D=16.33)、女子(146人)の平均得点は、92.54(S D=16.12)となった。男子の最低点は48点、最高点は129点であった。また、女子の最低点は35点、最高点は130点であった。平均得点を見る限り女子の方が男子よりも3.19点高く出ているが、男女間の差の検定(t値、 $.2 < P < .1$)は、傾向はあるものの有意とまではいえないようである。

今日まで、筆者は毎年のように講義の受講生にこのP I Lテストを実施しているので、今回の結果の比較の参考までに平均得点の推移を挙げてみることにする。たとえば、1991年度の実施結果は、男子大学生(443人)について、 $M=92.53$ ($S D=14.49$)、女子大学生(358人)について、 $M=91.94$ ($S D=14.02$)となり、男女間に有意差はなかった(鳥山, 1992)。同様に、1992年度の実施結果は、男子大学生(445人)について、 $M=92.60$ ($S D=14.72$)、女子大学生について、 $M=93.52$ ($S D=14.75$)となり、これも男女間に有意な差はなかった(鳥山, 1993)。

2. あなたのライフ・スタイル—今とこれから—

①「あなたの人生観は？」 Table 1.「人生の見方」

	男 子	女 子	全 体
・ 楽天的	66人 (45.52%)	64人 (43.84%)	130人 (44.67%)
・ 悲観的	19人 (13.10%)	15人 (10.27%)	34人 (11.68%)
・ 日和見的	45人 (31.03%)	56人 (38.36%)	101人 (34.71%)

大学生の人生観を3つの観点から選択させた結果、男女ともにほぼ同傾向の割合が見られた。すなわち、「楽天的」な人が4割強で最も多く、次に「日和見的」な人でそれぞれ3割から4割近く見られたが、「悲観的」な人は1割少々で最も少なかった。人生を「悲観的」と見る大学生は非常に少ないといえる。

次に、これらの3つの「人生の見方」を選ぶ大学生たちのP I L得点の平均値に異同があるかどうかを見てみよう。

Table 2.「人生の見方」とP I L得点の平均値と標準偏差

	男 子	女 子	全 体
・ 楽天的	M=94.70 (13.14)	97.77 (12.17)	96.21 (12.76)
・ 悲観的	M=79.37 (17.29)	69.40 (14.99)	74.97 (17.05)
・ 日和見的	M=85.71 (17.76)	93.30 (12.80)	89.92 (15.67)

() 内はS D (標準偏差)

これらの3つの「人生の見方」について、P I L得点平均値に差があるかどうかを検定してみたところ、男女ともに分散分析のF値は1%レベルで有意となり、「楽天的」な人が最も高く、次に「日和見的」な人、そして、「悲観的」な人の順に「人生の目的意識」が低くなっていくことがわかった。

②「人生の目標としている人」

人生の目標とする人が「いない」と答えた人は、男子で88人 (60.69%)、女子で82人 (56.16%) であった。

一方、「いる」と答えた大学生たちが挙げている実在のモデルには、特に多いものとして以下のようなものが見られた。

男子：父親	9人	女子：母親	12人
先生	3人	父親	4人
学者・作家	4人	親	4人
芸能人	5人	祖母	3人
政治家・軍人	2人	友人	4人
社会奉仕家	1人	先生	4人
金持ち	2人	芸能人・アイドル	4人

この結果を見ると、頻数としてはさほど多くは挙げられていないが、比較的身近な人たちが人生の目標とされていることがわかる。また、男子は、社会で活躍する（した）有名人を具体的に挙げる人が多いのに対して、女子は、テレビなどで人気のあるタレントが幾人か挙げただけである。ただ、男子の場合、目標とする人が「父親」であることは素直にうなづけるが、それを女子も「母親」に次いで挙げている点は興味深い。女子は将来の就職や社会的進出を目指すとするれば、その範型（モデル）は「母親」よりも「父親」の方に求めやすいということであろうか。結論としては、これだけでは論断できないが、男子の視点は家族以外の人にもというように遠心的であり、女子のそれは近縁者に向けられ求心的である、といえるかもしれない。

③「欠点、弱点、苦手なもの、コンプレックス」

大学生たちが常日頃自覚していたり、実際の経験上でいろいろな形で失態を演じたり、難儀をかかったことのある自身の特性を区々に挙げているものを、似たものでまとめてみると次のようになる。

- 男子の場合：1. 体格・背が低い（4人）・肥満・短足・体力がない→→8人
 2. 恥ずかしがり・人前に出ること（6人）・対人恐怖・他人の目・大勢の前・知らない人・初対面の人・友達づきあい→→16人
 3. 気が弱い・引っ込み思案・口べた・ドジ・自信欠如→→10人
 4. 女の子・自分より上手な人・自分より強そうな人・自己中心的な女・底の浅い人・対人不信・常識を欠いた人→→7人
 5. 神経質・心配性・自虐的・意志貫徹不可・性格（3人）・優柔不断（4人）・打たれ弱い・頑固・責任感なし・無気力→→15人
 6. カエル・ゴキブリ（2人）・虫・昆虫系の生物・犬・柿
 7. 朝苦手・酒弱い・注射・字がきたない・暗記力・カラオケ
 8. 「ない」、および、無回答→→39人
- 女子の場合：1. 体型・背が低い・体が弱い・体力がない・運動神経→→17人
 2. 容姿・デブ・顔・毛深い・ほくろ・目→→23人
 3. 短気・自己中心・わがまま・すぐすねる・強がる→→15人
 4. すぐあきらめる（5人）・意志が弱い（3人）・自信がない（8人）・いやなことから逃げる（7人）・弱気→→21人
 5. 対人関係（9人）・恥ずかしがり・劣等感・思ったことが言えない（6人）・人見知り（4人）・あがりやすい→→22人
 6. 優柔不断・考え込む（11人）・性格（13人）・消極的（4人）
 7. きつい人（3人）・男の人に人見知り・父・母・兄・親・家族
 8. 人混み・高所・暑い所・暗い道・閉所
 9. 虫（4人）・くも・爬虫類・犬・幽霊・怪談・にんじん・ピーマン

10. 「ない」, および, 無回答→→11人

男女ともに対人関係に苦労している図がうかがえる。そして、精神面における自分の弱さを不甲斐なく思っているようである。どちらも身体的な面に意識が向けられているが、女子においてはさすがにスタイルや容姿への関心が高い傾向が著しいことがわかる。回答に当たって、男子は単純に1, 2件記入しているのに比べて、女子はひとりで幾つも並記することが多く、それだけ頻数も多くなった経緯がある。

④「くせ」

これは③の設問に関連するものも含まれるが、より具体的な行為・行動面に示されるものとして、あまり好まれない習慣について問うている。

男子の場合：1. 爪をかむ（5人）・頭をかく（4人）・髪をかきあげる（3人）・鼻をさわる（2人）・指をならす（2人）・関節をならす（2人）
 2. なまけぐせ（3人）・困難や嫌なことを避ける（2人）・悲観的（2人）・あきっぽい・あとまわし・追い込まれるとあきらめる
 3. 快楽のみを追求・言い訳・手を抜く・浪費・楽天的に考える
 4. 人見知り（2人）・人の動き観察（2人）・福井弁（2人）・無口・顔色をうかがう・笑ってごまかす・早口

女子の場合：1. 髪をさわる（25人）・爪をかむ（7人）・鼻をかく（4人）・指をいじる（4人）・目をいじる（3人）・耳たぶさわる（3人）・首をさわる、顔をさわる、頭をいじる、頬杖をつく、爪をならす（各2人）・まばたきしすぎ（2人）・指をならす・舌をかむ・くちびるさわる
 2. 腕を組む（5人）・足を組む（3人）・猫背（2人）・内股・がに股
 3. 考え込む（8人）・楽観的（5人）・優柔不断（4人）・悲観的（4人）
 4. 人間観察（4人）・キョロキョロする（3人）・強がる（2人）・疑い深い（2人）・人見知り・人の目見られない・人の顔色うかがう

女子において、髪の手をさわる癖の人が非常に多いことがわかる。男女ともに、爪をかんだり、頭や顔の部分はいじる人が多い。そして、癖というよりも、心のあり方のままならない苦しさを訴えている性格傾向の認知が表現されている。

⑤「星占いやその他のいろいろな占いを信じるか信じないか」

いわゆる占いごとで自らの人生や行動の指針を得ているか否かについての設問である。それぞれを選んだ人の割合とPILテスト得点の平均値、そして、人生観（楽天的・悲観的・日和見的）との関連を検討した。

Table 3. 「占いを信じる・信じない人の割合」

	男 子	女 子	全 体
・ 信じる	44人 (30.34%)	91人 (62.33%)	135人 (46.39%)
・ 信じない	93人 (64.14%)	48人 (32.88%)	141人 (48.45%)

*男女の差のカイ2乗検定 $P < .001$

Table 4. 「占いを信じる・信じない人のP I Lテスト得点平均値」

	男 子	女 子	全 体
・ 信じる	M = 88.48 (S D = 16.23)	92.80 (16.04)	91.39 (16.23)
・ 信じない	M = 89.37 (S D = 16.41)	90.56 (15.19)	89.77 (16.02)

*男女ならびに全体の信・不信間はいずれも $n.s.$

Table 5. 「占いを信じる・信じない人の人生観」

男子について

	楽天的	悲観的	日和見的
・ 信じる	24人 (54.55%)	5人 (11.36%)	12人 (27.27%)
・ 信じない	40人 (43.01%)	12人 (12.90%)	33人 (35.48%)

女子について

	楽天的	悲観的	日和見的
・ 信じる	40人 (43.96%)	9人 (9.89%)	38人 (41.76%)
・ 信じない	21人 (43.75%)	6人 (12.50%)	16人 (33.33%)

この結果から言えることは、見事に男女の間にまったく逆の数値が見られるということである。すなわち、女子のほぼ3分の2が「占い」を信じ、男子の3分の2が「占い」を信じないということである。巷間では、いろいろな占いや八卦見、おみくじや血液型性格判断といった非科学的な運命鑑定があるが、大勢として女性の興味や関心の方が高く、また、それを心のよすがとしている趣があるが、大学生においてもその傾向がつぶさに見られる結果となった。

占いを信じるか信じないかの別とP I L得点の平均値、および、人生観の違いとはほとんど関連がみられなかった。男女とも「信じる」人の方が「楽天的」であるといった若干の結びつきがあるようではあった。そして、「楽天的」で「信じる」人のP I L得点平均値は、確かに高い傾向が見られる。

⑥ 「人生のキーワード」

調査用紙にあらかじめ挙げられた14個のキーワードから複数のことばを選ぶ課題である。

男子のベスト5は、(1)「努力」79人 (54.48%)、(2)「チャンス」77人 (53.10%)、(3)「人望」63人 (43.45%)、(4)「実力」59人 (40.69%)、そして、同じく(4)「人柄」59人 (40.69%)、の順であった。

一方、女子のベスト5は、(1)「努力」100人 (68.49%)、(2)「チャンス」92人 (63.01%)、(3)「人柄」83人 (56.85%)、(4)「運命」57人 (39.04%)、そして、(5)「人望」52人 (35.62%)、の順であった。

⑦「癌や難病とわかった時、残された時間をどのように過ごすか」

これは仮に人生の途上で極限的な状況に追いつめられた時、人は如何にその限られた時間を過ごすかの想定の中に、その人の価値づけの真相が露呈されるのではないかと考えて出題された設問である。記述された回答を類似したものでまとめると以下ようになった。

男子の場合：1. 自分のしたいこと、やり残したことをする→→41人

2. 大切な人と過ごす→→11人

3. 旅行・登山・思い出の地へ→→14人

4. 今まで通りに過ごす→→17人

5. 人の助けになる行為→→5人

6. 闘病・治療法を見つける→→3人

女子の場合：1. 楽しむ・遊びまくる→→49人

2. 彼氏と共に過ごす→→20人

3. 家族と過ごす→→10人

4. 旅行・思い出づくり→→15人

5. 自伝・本を書く→→5人

6. 感謝・恩返し→→3人

筆者の同様の研究（鳥山，1981，1984，1986）においても、ほぼ同じ結果が得られているが、ドイツやオーストリアの大学生と比較して、日本の大学生の回答は概して自己欲求充足的に表明されがちであるが、今回も類似の傾向が見られた。それは自己中心的（ego-centric）であり、私事主義（privatism, あるいは，meism）的であるといえよう。あまり社会への奉仕や参画の行動提起は念頭にないようである。そして、自分や身近な人たちへの関心が次に顕著に見られるという結果が示された。

⑧「大切な人」

これはいわゆる「重要他者」（significant other）を問うものである。

男子の場合：1. 恋人・彼女→→28人 女子の場合：1. 母親→→35人

2. 友・親友→→10人

2. 恋人・彼氏→→24人

3. 自分→→10人

3. 友人→→13人

4. 母親→→9人

4. 自分→→13人

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 5. 親, 両親→→6人 | 5. 家族→→7人 |
| 6. 父親→→6人 | 6. 親→→4人 |
| 7. 家族3人, 祖母2人,
弟, 妹 | 7. 父親→→4人 |
| | 8. 祖母2人, 妹2人, 弟2人
兄2人, 姉 |

やはり, 男女共に, 母親や交際中の異性への思いが如実に示されていることがわかる。

⑨「あなたの特技や長所・魅力」

これは上述の設問③と④のいわば反面として, 今度は自分の肯定的な面を尋ねるものである。

- 男子の場合: 1. 優しい 7人, 温和 2人, 思いやりがある 2人, おおらか 2人,
度量が大きい 2人,
2. 努力家 5人, 粘り強い 7人, 責任感・使命感 6人,
3. 明るい 6人, 楽しい 2人, 健康・丈夫 6人,
4. 誠実・まじめ 6人,
5. 楽家・プラス志向 9人。

- 女子の場合: 1. 明るい 17人, 優しい 12人, 思いやりがある 9人, 協調性 7人,
2. 正直・誠実 15人, 責任感 3人,
3. プラス志向 6人, 前向き 5人, 脳天気 5人, 楽天的 3人,
4. あっさりしている 5人, おっとりしている 5人, 温和 2人,
5. 努力家 8人, 粘り強い 8人, 最後まで・根性あり 6人。

ここで目立つことは, 男女共に, 「優しい」とか「明るい」といった性格特性や, 「努力家」「まじめ」「粘り強い」「プラス志向」, といった物事への好ましい構えのことが多数挙げられていることである。

⑩「あなたの生き甲斐・夢・あこがれ」

大学生たちの将来展望を自由に描いてもらう設問である。

- 男子の場合: 1. 結婚・幸せな家庭 8人,
2. 好きなことをする 30人,
3. 人助け・カウンセラー・教師・法曹界・警察官 7人,
4. 会社・店経営 6人, 金持ち 7人,
5. 有名人 11人, 世界一周旅行 8人。

- 女子の場合: 1. 結婚・家庭・母親 22人,
2. キャリアウーマン 22人,
3. 旅行・留学 8人,
4. 児童福祉司・幼稚園教諭・学習塾講師 4人,

5. 金持ち 4人, 会社経営 2人。

この設問についても非常に自己の欲求に対して忠実であることがよく示されていて、対社会への関心の薄さが露呈されているようである。

考 察

1. 大学生たちの人生の見方

この調査の結果が、現代の大学生一般の人生観を代表しているとは断定できないが、およそその精神状況の大勢からはずれているものでもないだろう。20世紀の後半のほぼ30年間にずっと指摘されてきたように、大学生たちはあまり深刻に悩むことが少なく、狭い視界で現実的かつ即物的であると言えよう。今回の調査対象の大学とそこに学ぶ大学生たちだけの傾向であるかもしれないといった制約はあるとしても、彼らが比較的平穏でのどかなキャンパスで、厳しい試練もなく年月を重ねている姿は、現在のわが国のほとんどの大学において見られるものであろう。

Table 1.にあるように、男女とも「楽天的」な人が4割を超え、「日和見的」な人を加えると約8割の人が、人生についてさほど重荷とも思わず肯定的に捉えていることがわかる。わずか1割ほどの人が「悲観的」な見方で人生を展望しているようである。それは、PILテストの平均得点の差にも表れており、「楽天的」「日和見的」な人の平均得点は全体の平均得点よりも優っていることからわかる。やはり、「悲観的」な人の人生に対する目標志向性や生き甲斐感はかなり低いようである。

2. 人生の目標となる人と生き甲斐

男女とも約6割の人には当面「人生の目標となる人」はいないようである。現代の若者には、有名人志向はあっても、いわゆる立身出世願望は比較的乏しいといわれている。おそらく1979年度に開始された「大学入学共通一次試験」制度以降、大学間の格差が明確となり、入学可能な能力（学力）の偏差値が学生たちを序列化したために、国公立の大規模伝統校や大手私大に学ぶ学生と地方大学や弱小私大に学ぶ学生との間に、いわゆる「自己効力感」に差が生じ、それ相応に人生の目標を定める学生たちが増加したのであろう。

さらに、世界は2度の大戦を経験し、歴史上に名を残す学者、発明家、政治家、その他の文化人といった人たちの業績も、時に問い直され、時に再評価されたりして、かつての栄光も泥にまみえる事例が相次いで出現する20世紀後半であった。その情報のシャワーを浴びた若者たちが、偉大な業績を挙げた有名人の成果の一部は承認するものの、一部には疑問を抱きアンビヴァレントな見方にとられるのも無理からぬものがある。人類の平和と幸福に貢献するはずであった科学的英知の産物である理論やその応用、自然の改良と活用に益するはずであった化学物質や薬品・薬剤、そして、最大多数の最大幸福を目指すべく思量された社会・政治体制の誤算と暴虐の所業、等々枚挙に暇がないが、このような数々の事実がマスメディアによりTVという映像を通して明らかにされ、偉大とされた人々が

断罪され破滅する情景を目の当たりにすれば、清廉無欠の若者であればあるほど、幻滅と迷妄に陥らされることは蓋し当然である。

そのような背景も一因となっているのだろうが、筆者の見るところ最近30年間の大学生たちの生存態度に覇気がなく、中庸感と言え言えるのだが、無理せず高望みせず、「我が道を行く」といった体でもなく、保守的で「指示待ち」的な安全志向を旨としているように見受けられる。

今回の調査でも、将来の人生のモデルとなる人をしっかりと心に描いている人数は少なく、男女とも肉親や先生といったごくごく身近な人であるといった回答が多数を占めていることがわかる。特に、男子は父親、女子は母親、祖母、というように同性の先輩としての肉親を挙げている。そのような家族以外の人をモデルにしようとしている人は、男子に若干多く「普通の人」以上の人生目標を掲げていることがわかる。

この回答傾向は、設問⑩の「あなたの生き甲斐・夢・あこがれ」についての回答内容にも連なっているように思われる。すなわち、女子の場合の結婚・幸せな家庭願望とキャリアウーマン志向、そして、男子のマイペース志向と結婚・幸せな家庭願望・会社や店の経営、といった「普通の人」の「夢」に表されているのではないだろうか。向社会的な(prosocial)援助・奉仕といった行動への意欲は乏しく、また、栄達への大望を表明する回答も非常に少数であった。

3. 大学生の自己認知と対人関係

まず、大学生の「欠点、弱点、苦手なもの、コンプレックス」であるが、男女に共通して多い項目は、身体的な容貌に関するもの、性格特性としてはネガティブに思われる側面、そして、対人関係の際の窮屈な感覚である。

青年期にある彼らにとって、やはり「かっこよさ」が大きい価値を持つのは当然で、人から見られる自分の「ルックス」や「スタイル」にとりわけ意識が集中し、その良し悪しが自信や自己肯定感に結びつき、自尊心や優越感を引き起こすのであろう。その傾向は、特に女子において著しい結果となっている。

その次に、性格面での未成熟さや意志の弱さ、決断力のない不甲斐なさと小心翼翼さの自覚の表現が多く挙げられている。行動や態度において、自己の思うようにならないうらみや不如意感を訴えているのだろう。

そして、対人場面における萎縮感、羞恥感、恐怖感が区々に挙げられている。日本文化が長年にわたって温存している社会的対処傾向としての「対人恐怖的心性」は、青年であればあるほど、より強く抱かれるものであるが、その通り大学生たちの多くの人に宿っているようである。ただ、近年は20世紀前半までの「恥ずかしい」という思いよりも、むしろ「人が怖い」という思いへとニュアンスが移ってきていると精神科医たちによって指摘されている(内沼, 1990)。つまり、かつての「赤面恐怖」「視線恐怖」「あがり恐怖」もまだ確かに症状として訴えられるが、それと同時に異性一般や「強そうな人」「初対面の人」「常

識を欠いた人」, また, 「きつい人」が苦手な「怖い」という訴えの方が目立ってきているというのである。この後者のような人に出会った時に, どのように対応すればいいのかわからず, 威圧されたり圧迫感を覚えて進退窮まってしまうようである。それで逃げ腰になったり, 深慮遠謀したり, 反動形成的に必要以上に善人を演じたりして, それはもう大変疲れてしまうのであろう。これは現今の核家族に育ち, 一人っ子だったり, せいぜい2人, 3人兄弟というように同胞の少なさから, 対人競合の経験に乏しいという性格形成過程に起因するものと思われる。

これは設問④「くせ」についての回答からも証明できるだろう。たとえば, 人見知りする, 人の動きを観察する, 人の顔色をうかがう, キョロキョロする, 人の目を見られない, そして, 疑い深い, といった臆病で警戒心の強い対応に反映されているのである。

さらに, 設問⑨「あなたの特技や長所・魅力」について尋ねられると, 努力家やプラス志向, 性格面の誠実さや責任感の強さ, 明朗さや楽天主という長所が挙げられているものもさることながら, 男女とも, 「優しさ」や「温和」, 「思いやり」や「協調性」といったことを多数挙げて対人関係をこなしている図は, 上に述べてきたことを補足するにあまりあるのではないだろうか。

現代の青年の「優しさ」は, 「相手を傷つけないし, 自分も傷つきたくない」といった微妙な心理に基づくものであると, 精神科医の大平(1995)は指摘している。これは米国の精神分析医ベラック(Bellak, L., 1970)が命名した, いわゆる「山アラシ・ジレンマ」(porcupine dilemma)に通ずるもので, 他者との適度な心理的距離をめぐる葛藤に青年たちは陥っているのである。しかも, 現代の「山アラシ・ジレンマ」は, かつてのように棘の痛みや寒さを予期してトラブルを回避することで, 関係を継続するための適度な心理的距離を保とうとするのではなく, 深い関わりに入る前の段階で生じており, 「近づきたいー離れたい」といった極端なジレンマではなく, 「近づきすぎたくないー離れすぎたくない」といった, より「適度さ」に敏感なジレンマであると藤井(2001)は指摘している。そして, このような現代の「山アラシ・ジレンマ」に取り込まれないように青年たちは妙に「優しい」と言えようし, 直接の接触を回避して, 携帯ベルによる交友関係が「ベル友」と言われ, さらに最近は携帯電話やパソコンによるEメールのやりとりによる「メル友」といった眼をまみえない関係がはやっているのである。

直截で生身のことを恐れ, 用心深い対人距離をとることに汲々として, 対人関係の経験不足のまま, ふとした寂しさから相手を求め, 一見「優しさ」という幻影に酔わされ, 姿が見えないお互いの幻が寄り添うものの, 現実に幻滅し真の意味でお互いが「山アラシ」であったという痛苦を味わう青年たちが少なくない。

4. 占いを「信じる」女子と「信じない」男子

占いごとへの傾斜は, 元来, 女性において顕著であるというのは世間の相場であるが, 大学生の女子も62%という高い割合で「信じる」という回答であった。それに対して, 男

子の場合は「信じない」人が64%であった。まさに男女において正反対の結果となった。もちろん、女子の場合も、実際は、気軽な気持ちで、また、遊び心で、適度に「信じる」といった人が多いのであろうが、本調査で「よい占いの結果であれば、信じる」と回答した人も若干その他にいたので、さらに人数は増す勢いである。これが宗教的な信仰へとすぐには結びつかないだろうが、現今の一部の宗教教団や似非信仰集団の悪事と謀略を十分過ぎるほど知らされているはずなのに、ここには社会的な現象や事象への思索の脆弱さが露呈されているように思われる。男子の「信じる」人の約3割をも含めて、科学と合理性を学んでいるはずの大学生においてすら、このような非科学的で根拠のあやふやな占いに自己の人生を付託するという心性はどこからきているのであろうか。

そして、占いを「信じる」人の方が、人生を「楽天的」と見る傾向があり、さらに、PIL得点も概して高いという結果を考えると、大学生たちは真の意味で自由というよりも、『孫悟空』の物語にあるように、好き勝手に飛び跳ねている様は畢竟お釈迦様の手の平の上でしかないといった、仮想現実的で他律的・他動詞的な人生展望を抱いているかのように見える。

この点は、「人生のキーワード」についての設問に対して、女子は第4位に、男子は第6位に「運命」を挙げていることと符合するのかもしれない。ただ、救いは男女とも第1位に「努力」、第2位に「チャンス」を挙げていることである。まじめに「努力」をしていれば、やがて「チャンス」がやって来る、という単純明快な処世観を有している人が大半を占めていることがわかる。そして、次に「人望」があり、「人柄」が良ければ、人生において破綻を来すことはないだろうという考え方であろうか。そして、上述したように、女子の方が占いに凝る性向があるのと対照的と考えてよいのだろうか、男子の場合、キーワードに「実力」を第3位に挙げている点である。まだ、幾らか男子には積極的な行動能を身につけることこそ、人生を切り開くまさに鍵であるといった見方があるからであろう。

5. 難病で助からないと知った時、残された時間をどう過ごすか

当初の期待に応えてくれるような回答ではなかったが、むしろ、まだ人生の上り坂にある大学生たちにとっては、あまりにも唐突な設問であり、思いもかけない不幸な事態に直面させられて、当惑に加えて残念至極といった感慨の表明としてはなるほどと思わされる結果となった。つまり、生まれて生きて20年という彼らにとって、経験しないこと、知らないこと、味わったことのないもの、等々、際限ないと言え言えるだろう。そういう身ならば、限りある未来に未知の蜜を吸えるだけ吸い、味わうだけ味わいたいと願うのも正常なことであろう。

快楽志向と親和欲求の充足を目指す人が大半であった。人生の終焉に向けて静かに回顧、沈思黙考、静謐を願う人も少なくなかった。ただ、外部社会との接点に身を置こうとする人は非常にまれであった。彼らの視野は概して狭いという様態である。

また、筆者がかつて調査したドイツのミュンヘン大学とオーストリアのウィーン大学の

学生たちは、自己の死が迫ってきたとき、我執的な時間の過ごし方よりも社会奉仕的・自己犠牲的な回答をする人が多く、自己を見失う人はむしろ少なかった（Toriyama, 1981, 1984）。そして、キリスト教の教会に赴いて静かに祈る、懺悔する、残された人たちの幸運を願う、といった信仰に思いを馳せる人たちが多く、やはり、人生観の根底にキリスト教が深く根ざしていることがわかった。

今回の調査では、「占い」を信じる人が女子に6割、男子に3割もみられたにもかかわらず、寺や教会、あるいは、その他の宗教的な場所に行くとか、何らかの宗教的な行為をするといった回答が皆無であったのは意外であった。

最後に一番そばにいてほしい「重要他者」についての設問⑧であるが、男子は恋人や友人が多くて、肉親はさほど多くなかったのに対して、女子では母親や肉親・家族の人といった回答が多く、次いで恋人や友人であった。これも身近な人への傾斜が非常に強く、それ以外の外部社会の人が挙げられることはまれであった。そして、男女とも、「大切な人」は「自分である」という回答が10人ほどあったが、この点は自己愛的とも自己中心的とも言えようが、近年若者たちに多くみられる「自己愛性性格」の片鱗をのぞかせる人たち（小此木, 1981）であり、親や家族との葛藤やアンビヴァレントな関係が背景にあり、自己以外は信じられないといった訴えを暗に示しているのかもしれないと思われた。

ま と め

本研究で示されたことは、現代の大学生たちの中核的な様相とは言えないかもしれない。調査対象となった大学および大学生の位置づけもローカルなものと言われればそれまでである。しかし、ここに現れた姿も現今のわが国の大学生像の一部ではあるのである。

P I Lテスト得点の平均値にしても、まだまだ米国の例などから比較して10点は低いようである。男女に有意な差はなかったとしても、どうも筆者が最近毎年のようにいろいろな講義で実施している中で気づくことであるが、女子優位で男子が劣性である。将来を射程距離内に捕らえる力がむしろ女子において勝っており、男子はなかなか身に付かない様子である。ひとつには、女子の場合、いろいろな資格を取得する目的が先にあり、その志向性がP I Lテスト得点を高めているともいえ、まだ、就職や職業への展望にまで及んでいないかもしれない。一方、男子の場合は、長引く不況のご時世で、望み通りに就職を果たすことは困難であるという観測もあり、また、本当に生き甲斐を感じる職業に出会うまでは、少し自重してじっくりと世情を窺っていたいとの思いがあるのかもしれない。つまり、女子には着実早成を目指す人が多く、男子には徐行晩成でいいといった処世の構えがここに現れていると見ることができる。

今回の調査は、種々の点でいわゆる投影法的検索の手法の採用であると言えよう。調査対象の大学生たちの回答そのものを直接結果として得るよりも、それらの回答の奥にあるものを探ってエッセンスとなる心性を捉えようとしたのである。そのひとつは、彼らの自己像であり、もうひとつは、対他者関係である。「考察」で述べてきたことは、あくまでも

ひとつの解釈であり、牽強付会な分析であるといった懸念はある。それでも現代大学生の精神状況の「光」と「影」を示唆的に物語っているのではないだろうかと思っている。

「光」とは、大多数の大学生たちが人生を肯定的に生きようとしていることであり、「努力」を旨として「チャンス」の到来を待っているということである。女子に多い「占い」への仮託は、ひたすら「凶」への忌避と用心、そして、「吉」や「大吉」への切なる願望と行動への「気合い」掛けになっているのではないだろうか。そうでなければ、安易に「占い」などに行動の指針をうかつにも得られないだろう。「楽天的」だからこそ、「占い」をも試してみようとする気持ちが生じるのだろう。そして、男子は「誠実」で「まじめ」に、心の命じるままに生きたいと願う姿勢が示されていたように思われる。

一方、「影」の側面とは、対人関係における「縮み」傾向と表層的な「死生観」である。やはり、対他者場面で「気後れ」「人見知り」「萎縮」といった対人恐怖的心性が暴露され、「優しさ」を示すとしても、それは根底に「事なかれ」「摩擦回避」があり、畢竟「自我防衛的」、さらに「自己愛的」であることの反映であると言えよう。彼らは、一見、概して育ちがよくて善良であるが、キャンパスではなかなか屈託なさや開放感を示せていないように思われる。「自信」と「成熟した姿」が見られない。まだまだ、家庭、さらに言えば親の引力が強く、真の意味での自力歩行と独立自尊への道は遠いと言えるのではないだろうか。

今回の調査で読み取れる事項は限られたものであった。回答内容の分析も、筆者の独断と都合のよい分類・概念化に終始しているかもしれない。まだ探索段階の設問項目であったこともあり、あまり詳細に検討すべき内容ではなかっただろう。今後は、これらの設問項目を整理して、質問紙法的な「ライフ・スタイル」尺度のようなものにまとめてゆくことが次の課題である。

引用文献

- 秋葉英則編 1995 現代青年の行動様式と価値観 フォーラム・A
 Bellak, L. 1970 *The Porcupine Dilemma : Reflections on the human condition.* New York. Citadal Press. (小此木啓吾訳 1974 山アラシのジレンマ ダイアモンド社)
 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
 大平 健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店.
 小此木啓吾 1981 自己愛人間：現代ナルシシズム論 朝日出版社
 Toriyama, H. 1981 Death and personal value orientation. *Annual Report of Health Care Service Center*, 8. 190-199.
 Toriyama, H. 1984 Death and personal value orientation. *X X X III I C P Congress Report, Acapulco, Mexico.* 175.
 Toriyama, H. 1986 Death and personal value orientation. II. *Annual Report of Health Care Service Center*, 11. 101-117.
 鳥山平三 1992 ライフ・スタイルと価値志向 日本心理学会第56回大会 発表論文集 P.140 同志社大学
 鳥山平三 1993 ライフ・スタイルと価値志向(その2) 日本心理学会第57回大会 発表論文集 P.25 早稲田大学
 内沼幸雄 1990 対人恐怖 講談社